

歯学部のおい出

鹿児島大学名誉教授 植村正憲

鹿児島大学歯学部は昭和52年(1977)10月に設置されました。私と本歯学部とは妙なというか偶然な縁がありました

私は九州歯科大学を同49年に卒業後、すぐに広島大学歯学部口腔解剖学第二の助手に採用されました。私の教授(松島教授)に連れられ隣の研究室の歯科理工学(中沢教授)にご挨拶に伺いました。しばらくすると中沢先生がいなくなったことに気付き私の教授にお尋ねしたところ、鹿児島に歯学部ができるので準備室長で転出されたとのことでした。従って、本歯学部とはその頃から縁があったわけです。

その後、昭和60年(1985)4月に長崎大学歯学部助教として着任、6年くらい経った平成3年(1991)10月頃本歯学部から口腔解剖学第一(仙波教授)の公募の回覧がきました。仙波教授の定年は翌3月で、一般的には当時定年教授の後任の公募は早くなったとはいえ12末~1月ころが一般的でしたので、「えらく早いな、どうしてだろう」と思いながら、鹿児島の歯学部に関心は居ないし、内部状況が全くわからず、応募を迷ったのを覚えております(赴任後で知ったことですが、早まったのは、歯科医学教育で教授不在の教育の孔を最小限にしたかったとのことでした)。当時所属(長崎大学)しておりました六反田教授に了解を頂き私の一存で応募致しました。このことを広島の松島教授に伝えると、だいぶ経って「応募者は8名だ」とのことで、それを聞き、「ああダメだな」と思って、せっかく作った応募書類ですので、次の応募先の準備のために書類をさらに2部用意しました。応募のことをほとんど忘れた5月の連休明けに六反田教授に「ちょっときて」と言われ教授室で「あんたとおったよ。いま小片教授から電話があった。赴任は7月1日付け」と伝えられ嬉しさよりも予想もしていなかったので驚いたのが本当のところでした。

本歯学部学部長(小片教授)に挨拶に伺った6月中旬2階エレベーター前で声をかけられ振り向くと見覚えのある顔でした。私の第一声は「こんなところで何してるの」で、「僕は補綴の助手ですよ(居るのが当

たり前よ)」が返事でした。長崎大卒の迫田先生でした。それから私の前任時代の広島大・長崎大卒業者が何人もいることを知り、感激しました。また知り合いが居ないと思っていた先生方の中に、学生時代の九歯大助教授の井上教授(歯科理工学)、広島時代の講師だった西川教授(歯科薬理学)、全く知見はありませんでしたが九歯大卒の自見教授(補綴学)などご縁のある先生がおられびっくり致しました。

鹿児島在任時代の大きな出来事として思い出すのは、医歯学総合研究科設立と卒業試験不祥事です。後者は、私の学部長時代で当初驚き面食らいましたが調査を進めるうちに、調査委員会の先生方のおかげで全貌が見えてきましたので、冷静に間違いなく事後のことを考えなければ、と比較的落ち着いてバタバタした感じなく対応する事ができました。研究科設立では、歯学部長の大工原教授(生化学)から「たのむ、いってくれ(医学部との話し合いに)」と言われ、「一寸待ってください。ペーペーの教授ではダメですよ。ベテランでない」と固辞しましたが、押し切られ遂に私が担当になりました。医学部の担当は吉田教授(病理学、元学長)でした。文科省は、「大学院化は当初は東大・京大など七帝大だけ、次に旧六医専(例外は神戸大くらいしかなかった)」で打ち止めのつもりでしたので、吉田教授は新制大医学部として最初に認められたいと、研究科移行(大学院化)にとっても張り切っておられ、もう歯学部は仲間のつもりで臨まれていました。私個人は歯学部の自由度が失われるのを恐れ反対でしたが、時代の趨勢もあり「歯学部の人事・予算はこれまで通り歯学部教授会で決定、研究科長の交代制」の三つが合意できれば歯学部教授会を説得しますと申し入れたところ、吉田教授はいとも簡単に「そんなの当たり前のことだ」とのことで合意に達し、歯学部も協力体制になりました。しかし予想通り、それからの文科省との交渉はきわめて困難を極めました。年度末3月、文科省にいった時には「もう来る必要はありません」と言われましたが、吉田教授が先頭に立ち、当時の財務部長さんのご協力もあり、粘りに

粘り遂に年度を超えた5月連休を過ぎてOKがでたし
だいです。

以上、つたない思い出文で申し訳ありませんが、文
科省との交渉など書いているうちに初代教授の学部認
可やその後の整備予算要求など創立期のご苦勞が偲ば
れ、改めて感謝の気持ちが湧き上がって参りました。
40周年を迎え、これまで歯学部を通過していった我々
OBは、歯学部の発展のため努力し、唯々これまで以
上の歯学部の発展を祈り確信する次第です。